

第2特集

児童虐待対応 現在地とプライマリ・ケアでできること

児童虐待と聞くと、子どもに暴力を振るったり暴言を吐いたりする、極端で悪意のある養育者を思い浮かべる方も多いのではないのでしょうか。しかし、実際に児童虐待現場で出会う家族は、そのようなイメージに当てはまる人ばかりではありません。

誠実に子育てに向き合うなかでのかかわりが、思いも寄らず「虐待」と判断されることもあります。また、しつけのつもりで行っているかかわりが、結果として子どもに強い恐怖や苦痛を与えてしまうこともあります。さらに、孤立や疲労、病気、経済的困難などを背景に、養育が難しくなってしまうこともあります。児童虐待は特別な誰かの問題ではなく、意外と身近に存在し、誰もが当事者になりうる課題です。日常の何気ない言動が、状況によっては子どもを傷つけてしまうこともあります。本特集では、その身近さをまず感じていただければと思います。

そして、こうした身近な課題であるからこそ、身近な存在であるプライマリ・ケアにできるかかわりがあると考えます。児童虐待への支援を育児支援の延長線にある課題として捉え、より身近に、よりフラットに、私たちにできるかかわりを考えるきっかけに本特集がなれば幸いです。

編集幹事

きたなら駅上ほっとクリニック／
名古屋大学大学院 医学系研究科 総合診療医学分野

宮本侑達